

小学校における思考力・表現力を育成するカリキュラムの研究

— 中学校への円滑な接続を図るための言語活動を位置付けた年間指導計画作成を通して —

呉市立下蒲刈小学校 石廣 幸恵

研究の要約

本研究は、中学校への円滑な接続を図るための言語活動を位置付けた年間指導計画作成することで、小学校における思考力・表現力を育成するためのカリキュラムの在り方について明らかにしようとするものである。所属校の年間指導計画において、中学校との円滑な接続を踏まえた具体的な言語活動を位置付けるという視点が不足していることから、言語活動を明確に示した年間指導計画が必要であると考えた。文献研究から、思考力・表現力を育成するためには、小学校第6学年及び中学校第1学年における学習内容や指導事項の系統性を明らかにすることが先決であることが分かった。そして、国語科、算数・数学科における指導事項と言語活動を整理した表や算数・数学的活動表を作成した。以上のことを踏まえ、中学校への円滑な接続を図るための言語活動を位置付けた年間指導計画を作成した。

キーワード：思考力・表現力 円滑な接続 言語活動

I 主題設定の理由

小学校学習指導要領解説総則編（平成20年、以下「解説総則編」とする。）では、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に習得させ、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力を育むことが求められている。また、中央教育審議会答申「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について」（平成20年、以下「中教審答申」とする。）では、発達の段階に応じた教育課程上の工夫の観点から、学校段階間の円滑な接続に留意する必要があることが述べられている。

所属中学校区では、小中一貫教育を推進する中、所属小学校の算数科の授業において、言語活動（書く・話す・聞く）を取り入れた授業を行うなど、児童に思考力・表現力を育む取組を進めてきた。しかし、平成24年度全国学力・学習状況調査の結果から、所属中学校区の児童生徒に思考力・表現力を十分に育成することができていないことが分かった。これまでの実践は、中学校の指導内容との系統性や関連性をもたせた年間指導計画が不十分で、系統立った指導を展開していなかった。そのため、思考力・表現力を育成するうえで重要な言語活動の位置付けも不十分であった。

そこで、これらの課題を解決するために、まず、教科の目標や特質に応じた言語活動を具体化してい

く。そして、中学校第1学年との系統性や関連性を明確にし、中学校への接続を意識した小学校第6学年における言語活動を位置付けた年間指導計画を作成していく。このことが、所属小学校の児童の思考力・表現力を育成することにつながると考え、本主題を設定した。

II 研究の基本的な考え方

1 思考力・表現力について

(1) 思考力・表現力に関する課題

学校教育法第30条第2項において、「生涯にわたり学習する基盤が培われるよう、基礎的な知識及び技能を習得させるとともに、これらを活用して課題を解決するために必要な思考力、判断力、表現力その他の能力をはぐくみ、主体的に学習に取り組む態度を養うことに、特に意を用いなければならない。」と小学校教育の目標が規定されている。ここでは、学力に重要な三つの要素として、①基礎的・基本的な知識・技能の習得、②知識・技能を活用して課題を解決するために必要な思考力・判断力・表現力等、③学習意欲（主体的に学習に取り組む態度）が明確に示されている。

しかし、「中教審答申」において、「各種調査の結果からは、基礎的・基本的な知識・技能の習得については、個別には課題のある事項もあるものの、全体としては一定の成果が認められる。しかし、思

考力・判断力・表現力等を問う読解力や記述式の問題に課題がある。これらの力は現行学習指導要領が重視し、子どもたちが社会において必要とされる力であることから、大きな課題であると言わざるを得ない。」¹⁾と述べられている。また、平成24年度全国学力・学習状況調査結果からも、どの教科においても、選択式・短答式に関する正答率より、思考力・表現力が求められる記述式の正答率が低いという課題が明らかになっている。

なお、思考力と判断力の関係については次のように考える。認知とは、認識することであり、認識には思考が必要であると梅本（1996）は表現している。また、中村和世ら（2011）は、認知プロセスの中に、判断することが含まれていると述べている。これらの知見から、思考力の中に判断力も含まれると考え、引用文以外では「判断力」の表記はしないこととする。

(2) 思考力・表現力を育成するために

「中教審答申」では、「各学校で子どもたちの思考力・判断力・表現力等を確実にはぐくむために、まず、各教科の指導の中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得とともに、観察・実験やレポートの作成、論述といったそれぞれの教科の知識・技能を活用する学習活動を充実させることを重視する必要がある。」²⁾としている。そして、思考力・判断力・表現力等を育むために各教科において行う「体験から感じ取ったことを表現する」「事実を正確に理解し伝達する」といった重要な六つの学習活動例を挙げている。このような活動を各教科において行うことが不可欠であり、言語を通した学習活動を充実することにより、思考力・判断力・表現力等の育成が効果的に図られると述べている。

このことを受けて、「解説総則編」では、「各教科等の指導に当たっては、児童の思考力、判断力、表現力等をはぐくむ観点から、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語に対する関心や理解を深め、言語に関する能力の育成を図る上で必要な言語環境を整え、児童の言語活動を充実すること。」³⁾と明示されている。

つまり、言語は思考力・表現力の基盤となっており、各教科において、思考力・表現力を育成するためには、基礎的・基本的な知識及び技能の活用を図る学習活動を重視するとともに、言語環境を整え、言語活動の充実を図ることが必要であるといえる。

(3) 各教科で育成する思考力・表現力と言語活動の充実

「言語事項の充実に関する指導事例集【小学校版】」では「平成20年答申では、言語は、知的活動（論理や思考）の基盤であるとともに、コミュニケーションや感性・情緒の基盤でもあり、豊かな心を育む上でも、言語に関する能力を高めていくことが重要であるとしている。このような観点から新しい学習指導要領においては、言語に関する能力の育成を重視し、各教科等において言語活動を充実することとしている。」⁴⁾と示されている。また、相澤秀夫（2009）は、「思考力や判断力、表現力を高める観点から言語活動を充実させるためには、各教科における育成すべき思考力や判断力、表現力等を明確にしていくことが先決である。」⁵⁾と述べている。

そこで、国立教育政策研究所教育課程研究センター「評価規準の作成のための参考資料（小学校）」（平成22年）に記載されている教科ごとの評価規準をもとに、各教科における思考力・判断力・表現力及び、各教科の小学校学習指導要領解説に示されているそれぞれの教科の特質に応じた言語活動の充実についての2点を、表1のように整理した。

このように各教科で育成したい思考力や表現力を明確にすることで、教科特有の学習活動や身に付けさせたい思考力・表現力を見いだすことができる。また、各教科等で思考力・表現力を育成する上で効果的な言語活動を捉えることができる。

2 所属校の児童の実態

(1) 所属中学校区の進める小中一貫教育

呉市では全市をあげて小中一貫教育を進めており、所属中学校区でも学力・生活の両面から、小・中学校の教職員で中学校区の実態や課題を踏まえた小中一貫教育を推進してきている。

学力面については、各学力テストの課題を分析し、課題の解決に向けた指導法等について、合同の授業交流を通して研修を進めてきた。また、学びの基礎となる家庭学習や読書活動の推進を共通して行ったり、生徒の自尊感情を高め、児童に目標をもたせる合同授業を実施したりする等の様々な取り組みを行ってきた。生活面については、児童生徒の自尊感情を高める合同行事の実践や一貫性のある小・中学校の生徒指導規定の作成などの実践を行ってきた。また、体力向上を目指したプログラムの作成にも取り組んでいる。

小・中学校の教職員が、授業交流などの合同研修を中心に課題や指導法等の共通理解を図り、実践を積み重ねていくことで、各種学力テストの基礎的な

表 1 各教科における育成すべき思考力や判断力、表現力と教科の特質に応じた言語活動の充実について

	思考力・判断力・表現力	特質に応じた言語活動の充実
国語	・相手や目的、意図に応じ、話したり聞いたり話し合ったりし、自分の考えを明確にしている。 ・相手や目的、意図に応じ、文章を書き、自分の考えを明確にしている。 ・目的に応じ、内容を捉えながら本や文章を読み、自分の考えを明確にしている。	・日常生活に必要とされる対話、記録、報告、要約、説明、感想などの言語活動
社会	・社会的事象から学習問題を見いだして追究し、社会的事象の意味について思考・判断したことを適切に表現している。	・観察や調査・見学などの体験的な活動やそれに基づく表現活動
算数	・日常の事象を数理的に捉え、見通しをもち筋道立てて考え表現したり、そのことから考えを深めたりするなど、数学的な考え方の基礎を身に付けている。	・具体物を用いたり、言葉、数、式、図を用いたりして考え、説明する活動
理科	・自然の事物・現象から問題を見だし、見通しをもって事象を比較したり、関係付けたり、条件に着目したり、推論したりして調べることによって得られた結果を考察し表現して、問題を解決している。	・観察、実験の結果を整理し考察する学習活動や、科学的な言葉や概念を使用して考えたり説明したりするなどの学習活動
生活	・具体的な活動や体験について、自分なりに考えたり、工夫したりして、それをすなおに表現している。	・自分たちの生活や地域の出来事を身近な人々と伝え合う活動を行い、身近な人々とかわるごとの楽しさが分かり、進んで交流する活動
音楽	・音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、音楽表現を工夫し、どのように表すかについて思いや意図をもっている。 ・音楽を形づくっている要素を聴き取り、それらの働きが生み出すよさや面白さなどを感じ取りながら、楽曲の特徴や演奏のよさなどを考え、味わって聴いている。	・楽曲を聴いて想像したことや感じ取ったことを言葉で表すなどして、楽曲の特徴や演奏のよさを理解する活動
図画工作	・感じたことや材料などを基に表したいこと思いついたり、形や色、用途などを考えたりしている。 ・作品などの形や色などから、表現の面白さをとらえたり、よさや美しさを感じ取ったりしている。	・対象について感じたことなどを言葉にしたり友人と話し合ったりするなどの言語活動
家庭	・家庭生活について見直し、身近な生活の課題を見つけ、その解決を目指して生活をよりよくするために考え自分なりに工夫している。	・衣食住など生活の様々な言葉を実感をもって理解したり、自分の生活における課題を解決するために言葉や図表などを用いて生活をよりよくする方法を考えたり、実習などで体験したことをまとめたり発表したりするなどの学習活動
体育	・自己の能力に適した課題の解決を目指して、運動の仕方を工夫している。 ・身近な生活における健康・安全について、課題の解決を目指して考え、判断し、これらを表している。	・筋道を立てて練習や作戦を考え、改善の方法などを互いに話し合ったり、身近な日常生活の体験や事例などを用いて話し合ったりする活動

問題については、所属中学校区の小・中学校とも一定程度の成果を上げてきている。

(2) 所属校の児童の課題

所属小学校の全国学力・学習状況調査結果を表2に示す。特に、問題（B）については、全国平均と比較すると所属校の正答率が全国平均より国語科は7.8ポイント、算数科は15.2ポイント上回っており、一見課題がないように見える。

表2 全国学力・学習状況調査における所属小学校の正答率と全国平均との差

	問題（A）	問題（B）
国語科	86.3%（+ 4.6）	63.6%（+ 7.8）
算数科	77.8%（+ 4.3）	74.4%（+15.2）

しかし、設問ごとに詳しく分析していくと次のような課題が見えてきた。国語科では、話合いの目的を確認しながら計画的に話合いを進める司会の役割を選択する〔A話すこと・聞くこと〕領域の設問の正答率が低く、全体的に記述式の問題形式の正答率

が低い。算数科では、必要な情報を取り出し、判断の理由を記述する設問の正答率が最も低く、国語科と同じく全体的に記述式の問題形式の正答率が低い。

これらのことから、所属小学校の児童は、身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を活用して、読み取った内容から選択した情報を基に思考したり、思考の経過を表現したりする力に課題があるといえる。

3 中学校との円滑な接続について

(1) 中学校との円滑な接続が求められる背景

一般的に小学校段階に比べ、中学校段階では学習内容が高度化していくといわれている。例えば、千々岩弘一（2010）は国語科の説明力について、「中学校段階では、小学校段階で育成された理由や根拠、具体的例をもって説明内容を構築していく能力の基礎の上に立って、より論理性が保障された『説明内容生成力』を育成しなければならない。」⁶⁾と述べている。なお、『説明内容生成力』とは、説明する内容を作り上げる能力のことである。また、松本新一郎（2009）は数学的な表現力について、「中学校

数学科では、小学校算数科で学んできている推論（帰納、類推、演繹）をより一層高めると同時に、演繹的な考え方を中心として推論する能力を高めるねらいがある。自分の考えを他者に伝えるために数学固有の表現形式で話したり、かいたりする力が求められる。」⁷⁾と述べている。

「中教審答申」では、「子どもたちが思春期に入り、学習内容も高度化する中学校は、小学校段階に比べ、授業の理解度が低下したり、問題行動等が増加するといった多くの教育課題を抱えている。」⁸⁾と示され、子どもたちが順調に中学校生活を始めることができるよう中学校との円滑な接続を図ることが極めて重要であることが述べられている。このことから、諸問題を解決するために小・中学校間の円滑な接続を図ることが求められていることが分かる。しかし、学習指導面の課題の解決に向けて、中学校教員の行う乗り入れ授業や異学年で行う合同授業などの実践はあるものの、高度化する学習内容に対応できる児童を育成していくために、小学校のカリキュラムや学習指導を改善するという視点をもった先行研究は少ない。埼玉県立総合教育センターが発行している「授業力向上のための研修運営の参考例 Vol. 3」においても、中学校進学における諸問題を解決していくために、小・中学校の円滑な接続を図っていくことの重要性を理解し、特色ある取組を実施している小学校はあるが、そのほとんどが行事の交流などの体験活動を中心とした連携であることが指摘されている。

そこで、学習指導面における課題の解決を図った年間指導計画を作成し、それに沿った指導の実践が必要であると考え。

(2) 中学校への接続を意識したカリキュラム

中央教育審議会初等中等教育分科会学校段階間の連携・接続等に関する作業部会「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」（平成24年）では、「小中一貫」を、9年間を通じた教育課程を編成して行う系統的な教育と整理し、小・中学校9年間の学びを支える学校間の連携・協力体制の在り方について検討が進められていることを示している。また、齋藤義憲（平成21年）は、「小・中学校間の接続を滑らかにするため、小・中学校の教員が校種をこえて連携し、9年間の指導内容の系統性を考慮し、児童・生徒の発達段階に応じた連続性のある指導をすることが、今後ますます重要になってきている。」⁹⁾と述べている。つまり、学習指導面での小・中学校の接続を円滑にするためには、学習内容や指導事項の

系統性を明らかにし、それに基づいた年間指導計画が必要であると考え。しかし、所属校のカリキュラムを見ると、中学校との円滑な接続を踏まえ、児童の課題を解決するために、具体的な言語活動を位置付けるという視点は不足している。

これらのことから、本研究において、中学校への円滑な接続を図るための小学校第6学年における国語科、算数科の年間指導計画について考えていく。その計画には、学習内容や指導事項、言語活動について小・中学校の系統性を整理した上で、小学校段階で付けるべき力を踏まえた言語活動を位置付けていく。

なお、教科については、全国学力・学習状況調査及び、「基礎・基本」定着状況調査によるデータの経年比較を行いやすい理由から、教科を国語科・算数科に絞って計画を立てることとする。

Ⅲ 年間指導計画作成に当たって

1 教育課程編成について

「解説総則編」において、各学校において創意工夫を生かした特色ある教育課程を編成・実施し、特色ある学校教育活動を進めていくためには、地域や学校、児童の実態等を的確に把握・分析し、それを基に、学校の教育課題を明確にし、教育課程の編成と評価に当たることが重要であると示されている。

また、水戸部修治（平成21年）は、「国語科における魅力ある教育計画の立案」において、年間指導計画には活用の際の重点の置き方によりいくつかの種類があり、それぞれの特徴を踏まえた上で、授業改善に生かすという観点から、各学校において適切に選択する必要があると述べている。年間指導計画の種類と特徴を表3に示す。

表3 年間指導計画の種類と特徴⁽¹⁾

種類		特徴
1	すべての領域が全体にわたるもの	各領域等を能力的に関連させて指導するかが把握しやすい。
2	領域ごとに作成したもの	当該領域の単元間の関連性・系統性を見通しやすい。
3	複数学年のまとまりを見通せるもの	二学年間で繰り返したり発展したりするかが見通しやすい。
4	項目を絞り込み、一覧性を高めたもの	特定の指導事項の系統性が見通しやすい。

水戸部は、年間指導計画の備える条件として、①付けたい能力②単元の基本的な要素（単元名・教材名・実施時期・配当時間・主な学習活動など）③単元の評価のポイント（評価規準・評価方法など）④

関連性・系統性（国語科と他領域・各教科等とのかかわり・上下の学年とのかかわりなど）の四つを挙げている。また、年間指導計画を作成する際、年間指導計画をどう活用するのかを具体的なイメージを描きながら、必要な条件を選定し、形式を確定していくことが大切であると述べている。

これらのことから、所属校の児童の実態や重点目標との関連を図った年間指導計画を作成していくための必要な条件について整理していく。

2 所属校の研究実践等の関連を図った年間指導計画作成に必要な条件について

所属校では、児童の主体的な学びと表現力の育成をめざし、言語活動（書く・話す・聞く）の場を設定・工夫した学習プロセスの確立に重点を置き、研究を進めている。所属校の児童に、身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を活用して、読み取った内容から選択した情報を基に思考し、その経過を表現する力を育成していくために、次の年間指導計画を作成していく。国語科については、課題のある領域が特定しているので、表3の2「領域ごとに作成した年間指導計画」を作成する。領域は、〔A 話すこと・聞くこと〕に絞る。算数科については、領域や単元間のつながりを把握しやすい表3の1「すべての領域が全体にわたる年間指導計画」を作成する。

年間指導計画の備える条件としては、両教科とも、①単元の基本的な要素（単元名・実施時期・主な学習内容など）②関連性・系統性をもたせた指導事項（中学校第1学年とのかかわり）③言語活動（算数科については算数的活動）とする。

IV 各教科における言語活動について

1 言語活動を展開していくために

「言語力の育成方策について」（平成19年）には、学校段階ごとの指導の特質について、「幼児期から小・中・高等学校へと発達の段階が上がるにつれて、具体と抽象、感覚と論理、事実と意見、基礎と応用、習得と活用と探究などについて認識や実践ができる水準が変化している。それに応じて、指導内容や言語活動の特色付けをしていく必要がある。」¹⁰⁾と示している。また、相澤は（2009）は、「各教科等において言語活動を展開する場合には、それがどのような資質・能力の育成につながるのかを見通しつつ、効果的な言語活動を用意することが求められる。」¹¹⁾と述べている。

(1) 国語科における言語活動

小学校及び中学校学習指導要領解説国語編（平成20年、以下「小・中学校解説国語編」とする。）において、小学校第5・6学年と中学校第1学年の〔A 話すこと・聞くこと〕領域は、「話題設定や取材に関する指導事項」「話すこと」「聞くこと」「話し合うこと」と四つの指導事項に分けられることが明記されている。その四つの指導事項に合わせ、「小・中学校解説国語編」に示されている言語活動の具体例から、指導のポイントを整理したものを表4に示す。なお、「話題設定や取材に関する指導事項」については、「話す準備」と表記することとする。小・中学校における指導のポイントを比較すると、小学校段階においては四つの指導事項にバランスよく指導のポイントが位置付いている。しかし、中学校段階になると指導のポイントが位置付いていない指導事項もあり、内容についても簡単な表記のみである。このことから、小学校段階において基礎的な知識や技能を発達段階に応じて習得させ、中学校段階へと接続していることが分かる。中学校への円滑な接続を図るためには、小学校段階における指導事項を確実に習得させていく必要がある。また、中学校第1学年での指導のポイントを小学校第6学年から段階的に取り入れていくことで、より円滑な接続を図ることができる考える。

よって、小学校段階での指導事項と合わせ、中学校第1学年における指導のポイントを発達の段階に合わせて位置付けた国語科年間指導計画を作成していく。その際、表4の指導のポイントを基に言語活動を設定していく。

(2) 算数科における言語活動

小学校学習指導要領解説算数編において、算数科では、算数的活動を充実させ、基礎的・基本的な知識及び技能を確実に身に付けさせるとともに、数学的な思考力・表現力を高めることや学んだことを生活や学習に活用する態度を育てることを重視していると述べている。特に、①根拠を明らかにし、筋道を立てて体系的に考えること、②言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決すること、③自分の考えを分かりやすく説明すること、④互いに表現し伝え合うことなどの活動を適切に設定し、内容を工夫していくことが必要であると示している。これらの四つの活動は算数・数学的活動において重要な役割を果たすものであり、これらの活動の工夫を行うことが言語活動の充実につながると考えられる。

表 4 国語科〔A 話すこと・聞くこと〕における言語活動指導のポイント

		小学校第 5・6 学年	中学校第 1 学年
① 話す準備	事項指導	ア 考えたことや伝えたいことなどから話題を決め、収集した知識や情報を関係付けること。	ア 日常生活の中から話題を決め、話したり話し合ったりするための材料を人との交流を通して集め整理すること。
	ポイント指導	○ 話す内容と資料を整合させる。 ○ 本や文章を調べたり、インタビューやアンケートを行ったりするなどして、自分なりに幅広く考え、資料を用意させる。 ○ 事物や人物などの対象について十分調べ、そのよさを整理し、相手の要求や目的も考慮し、推薦したい点をまとめさせる。	○ 相手や目的に応じて、伝えるべき事柄を簡潔に分かりやすく書かせる。
② 話すこと	指導事項	イ <u>目的や意図に応じて、事柄が明確に伝わるように話の構成を工夫しながら、</u> <u>場に応じた適切な言葉遣いで話すこと。</u> ウ 共通語と方言との違いを理解し、また、必要に応じて共通語で話すこと。	イ 全体と部分、事実との意見との関係に注意して話を構成し、相手の反応を踏まえながら話すこと。 ウ <u>話す速度や音量、言葉の調子や間のとり方、相手にわかりやすい語句の選択、相手や場に応じた言葉遣いなどについての知識を生かして話すこと。</u>
	ポイント指導	○ 適切な時間や機会での資料の提示、スピーチ原稿や資料への目配りの仕方、相手の反応などに注意しながら話させる。 ○ 理由を説明したり、エピソードとなる事例を挙げたり、図解したりするなどして印象付けるように話させる。	
③ 聞くこと	事項指導	エ 話し手の意図をとらえながら聞き、 <u>自分の意見と比べるなどして考えをまとめること。</u>	エ 必要に応じて質問しながら聞き取り、 <u>自分の考えとの共通点や相違点を整理すること。</u>
	ポイント指導	○ 聞き手は、内容を理解し、自分の考えと比べてより自分の考えを明確にしたり、話し手の立場に立って助言や提案をしたりさせる。 ○ 聞き手は、推薦した理由がよく分かるか、納得できるかなどに留意して聞かせる。	○ 聞き手から質問したり、内容や伝え方について助言し合ったりする場を設けることで、表現の仕方や聞き方を互いに学び合わせる。
④ 話し合うこと	事項指導	オ <u>互いの立場や意図をはっきりさせながら、計画的に話し合うこと。</u>	オ 話し合いの話題や方向をとらえて的確に話したり、相手の発言を注意して聞いたりして、自分の考えをまとめること。
	ポイント指導	○ 話し合いで異なる意見や対立する意見が出たときは、準備した資料などに基づいて明確に対応させる。	○ 話の要点をメモしたり必要に応じて質問したりしながら聞き取り、互いの共通点や相違点を整理することを通して、建設的な話し合いをさせる。

(系統的につながっている内容 下線は稿者による)

この四つの活動のうち、所属校の児童の課題となる①根拠を明らかにし、筋道を立てて体系的に考えること、②言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決することの2点に絞って、数学的な思考力・表現力を高めるための算数・数学的活動を整理したものを表5に示す。表を整理する際、「小・中学校学習指導要領解説算数・数学編」に示されている算数・

数学的活動を参考にした。

V 年間指導計画の作成

中学校への円滑な接続を図るための言語活動を位置付けた年間指導計画の作成の手順を以下のように示す。

- ① 横軸に指導時期をとる。
- ② 国語科については、縦軸に表4の言語活動指導

表 5 数学的な思考力・表現力を高める算数・数学的活動表

	小学校第 6 学年	中学校第 1 学年
①根拠を明らかにし、筋道を立てて体系的に考えること	○学習情報の整理・選択 ・既習を振り返り、課題解決に必要な情報を整理・選択させる。 ○既習事項の選択 ・ <u>あらかじめ提示している課題解決に必要となる既習事項を選択させる。</u>	○学習情報の整理・選択 ・既習を振り返り、課題解決に必要な情報を整理・選択させる。 ○既習事項の選択 ・ <u>課題解決に必要な既習事項を考え、選択させる。</u>
②言葉や数、式、図、表、グラフなどの相互の関連を理解し、それらを適切に用いて問題を解決すること	○用語・記号・表現方法の理解 ・課題解決に必要な数、式、図、表、グラフなど意味や使い方を <u>理解させる。</u> ○自己の思考 ・解決の手立てとして、 <u>推論（帰納、類推、演繹）等を指導する。</u>	○用語・記号・表現方法の確認 ・課題解決に必要な数、式、図、表、グラフなど意味や使い方を <u>確認しておく。</u> ○自己の思考 ・解決の手立てとして、 <u>推論（演繹を中心に）等を指導する。</u>

(系統的につながっている内容 下線は稿者による)

のポイントと照らし合わせながら指導のポイントや言語活動を位置付けていく。〔A話すこと・聞くこと〕領域の四つの指導事項が1年間を通して偏りがなく位置付けられるように、重点をおいた指導事項に◎印を付ける。また、発達の段階に合わせて取り入れた中学校第1学年の指導のポイントを把握しやすいように、●印を付けていく。

- ③ 算数科については、縦軸に表5の数学的な思考力・表現力を高める算数・数学的活動表と照らし合わせながら、算数的活動を位置付けていく。また、国語科同様、発達の段階に合わせて取り入れた中学校第1学年の指導のポイントを把握しやすいように、●印を付けていく。

このようにして、単元ごとに言語活動の指導のポイントや算数・数学的活動を明記した年間指導計画を作成することにより、所属校の児童に、身に付けた基礎的・基本的な知識・技能を活用して、読み取った内容から選択した情報を基に思考し、その経過を表現する力を育成していくことができると考える。小学校第6学年国語科及び算数科の年間指導計画例を表6に示す。

VI 成果と課題

1 研究の成果

- 文献研究において、思考力・表現力を育成するためには、教科の目標や特質を踏まえた言語活動を発達段階に応じて設定することが有効であることが分かった。
- 所属校の児童の課題の改善を図った国語科の言語活動指導に関する表や算数科における数学的な思考力・表現力を高める算数的活動表を作成し、中学校への円滑な接続を図るための言語活動を位置付けた年間指導計画を作成することができた。

2 今後の課題

- 本研究で作成した年間指導計画を基に所属校で授業を実践し、その有効性を検証していく。そして、検証から得た課題を踏まえ、年間指導計画の改善を図っていく。
- 中学校への円滑な接続を図るために作成した小学校第6学年における年間指導計画を基に、更に学校6年間における系統性をもたせた他学年の年間指導計画を作成していく。
- 本研究で作成した国語科の言語活動指導に関する表や算数科の数学的な思考力・表現力を高める算数・数学的活動表を参考に、他教科における言

語活動表を作成し、年間指導計画を作成していく。

【注】

- (1) 水戸部修治（平成21年）：「国語科における魅力ある教育計画の立案」『初等教育資料5月号』東洋館出版社 pp. 22-23 年間指導計画の種類と特徴を基に稿者が作成した。

【引用文献】

- 1) 中央教育審議会（平成20年）：「幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善について（答申）」 p. 14
- 2) 中央教育審議会（平成20年）：前掲書 p. 24
- 3) 文部科学省（平成20年）：『小学校学習指導要領総則』 p. 52
- 4) 文部科学省（平成23年）：「言語活動の充実に関する指導事例集【小学校版】」 p. 3
- 5) 相澤秀夫（2009）：「学校全体で取り組む『言語活動の充実』」『初等教育資料8月号』東洋館出版社 p. 12
- 6) 千々岩弘一（2010）：「『説明力』を重視する三つの理由」『国語教育11月号』明治図書 p. 19
- 7) 松本新一郎（2009）：「『数学的な表現力』を育成する授業モデル」明治図書 p. 16
- 8) 中央教育審議会（平成20年）：前掲書 p. 48
- 9) 齋藤義憲（平成21年）：「連携・一貫教育で教師の相互交流や子どもの学校訪問などをどう行ったらよいか」『幼小・小・中・高の連携・一貫教育の展開』教育開発研究所 p. 155
- 10) 文部科学省（平成19年）：「言語力の育成方策について（報告書案）」 p. 19
http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chousa/shotou/036/shiryo/07081717/004.htm
- 11) 相澤秀夫（2009）：前掲書 p. 10

【参考文献】

- 中央教育審議会初等中等教育分科会 学校段階間の連携・接続等に関する作業部会（平成24年）：「小中連携、一貫教育に関する主な意見等の整理」
- 水戸部修治（平成21年）：「国語科における魅力ある教育計画の立案」『初等教育資料5月号』東洋館出版社
- 小森茂（平成22年）：「小学校国語科における指導のポイント」『新しい教育課程における言語活動の充実』学校図書
- 中村和世 他（2011）：学校教育実践学研究大 17 巻「図画工作・美術科における『ブルームのタキソノミー改訂版』の活用に関する考察」
- ヴィゴツキー著 柴田義松 訳（1967）：「思考と言語」明治図書
- 埼玉県立総合教育センター（平成25年）：「授業力向上のための研修運営の参考例 Vol. 3」